

# 確認テスト 1

氏名

氏名
----

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

大蔵卿ばかり耳とき人はなし。まことに蚊のまつげの落つるをも聞きつけ給ひつべうこそありしか。  
 職の御曹司おんざうしの西面にしおもてに住みしころ、大殿の新中将、宿直とのみにてものなどいひしに、そばにある人の、  
 「この中将に扇の絵のこと言へ。」とささめけば、「いま、かの君の立ち給ひなんにを。」と、いとみ  
 そかにいひ入るるを、その人だにえ聞きついで、「なにとか、なにとか。」と耳をかたぶけ来るに、  
 遠くゐて、「にくし。さのたまはば、今日は立たじ。」と④のたまひしこそ、いかで聞きつけ給ふらんと、  
 あさましかりしか。

〔枕草子〕第二五六段より

1 線①～④の主語（動作主）はだれか。次から選び、記号で答えよ。

- ア 作者（清少納言）    イ 大蔵卿    ウ 職の御曹司    エ そばにある人
- ① ( )    ② ( )    ③ ( )    ④ ( )

2 推量の助動詞「べし」のウ音便を、文章中から抜き出して書け。

[ ]

3 作者は、大蔵卿という人物をどのように評しているか。現代語で簡単に書け。

[ ]

- 1 15点×4  
 2 20点×1  
 3 20点×1

得点
100

# 確認テスト 2

氏名

氏名
----

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

四条大納言の、かく何事もすぐれ、めでたくおはしますを、大入道殿、「いかでか、かからむ。うらやましくもあるかな。わが子どもの、<sup>1</sup>影だに踏むべくもあらぬこそ、口惜しけれ」と申させ給ひければ、中の関白殿・粟田殿などは、「げに、<sup>①</sup>さもとや思すらむ」と、恥づかしげなる御けしきにて、ものも宣<sup>のたま</sup>はぬに、この入道殿は、いと若くおはします御身にて、「<sup>2</sup>影をば踏まで、つらをやは踏まぬ」とこそ仰せられけり。まことにこそ<sup>②</sup>さはおはしますめれ。内大臣殿をだに近くて見奉り給はぬよ。

〔大鏡〕道長伝より

1 線①・②の指示語は、何を指しているか。文章中から抜き出して書け。

① \_\_\_\_\_

② \_\_\_\_\_

2 線1「影だに踏むべくもあらぬ」を現代語に訳せ。

\_\_\_\_\_

3 線2「影をば踏まで、つらをやは踏まぬ」の意味として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 影法師は踏まないが、上位に立って面目はつぶしてやる。
- イ 影法師は踏んでやるし、上位に立って面目もつぶしてやる。
- ウ 影法師は踏まないし、上位に立って面目をつぶすこともしない。
- エ 影法師は踏めないし、上位に立って面目をつぶすこともできないだろう。

( )

- 1 25点×2
- 2 30点×1
- 3 20点×1

得点
100



# 確認テスト 4

氏名

--

**演習**

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

年月に添へて、(帝は)御息所みやすんどころの御事を思し忘るる折なし。慰むやと、然るべき人々を参らせ給へど、なずらひに思さるるだにいと難き世かなと、うとましようのみよろづに思しなりぬるに、先帝せんだいの四の宮の、御かたちすぐれ給へる聞こえ高くおはします。母后世になくかしづき聞こえ給ふを、上に侍ふ<sup>①</sup>典侍ないのりすけは、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見奉り、今もほの見奉りて、「亡せ給ひにし御息所の御かたちに似給へる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見奉りつけぬを、后の宮の姫宮こそ、いとよう覚えて生ひ出で<sup>②</sup>させ給へりけれ。ありがたき御かたち人になむ。」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねんごろに<sup>⑤</sup>聞こえさせ給ひけり。

(「源氏物語」桐壺より)

1 線1～5は、①だれの、②だれに対する敬語か。次から選び、記号で答えよ。(同じ記号を何回使ってもよい。)

- |   |   |   |     |   |     |   |        |   |    |   |       |
|---|---|---|-----|---|-----|---|--------|---|----|---|-------|
| ア | 帝 | イ | 御息所 | ウ | 四の宮 | エ | 典侍     | オ | 作者 | カ | 似給へる人 |
| 1 | ① | ( | から② | ) |     | ( | に対する敬語 |   |    |   |       |
| 2 | ① | ( | から② | ) |     | ( | に対する敬語 |   |    |   |       |
| 3 | ① | ( | から② | ) |     | ( | に対する敬語 |   |    |   |       |
| 4 | ① | ( | から② | ) |     | ( | に対する敬語 |   |    |   |       |
| 5 | ① | ( | から② | ) |     | ( | に対する敬語 |   |    |   |       |

2 線①「典侍」は、「先帝の四の宮」を、いつから知っていたのか。現代語で簡潔に答えよ。

[ ]

3 線②「させ給へ」は、「二方向への敬語」である。だれとだれに対する敬語か。文章中の言葉を書き抜いて答えよ。

[ ] と [ ]

4 線③「奏し」は、だれに対して用いられる敬語か。文章中の言葉を書き抜いて答えよ。

[ ]

- 1 10点×5
- 2 20点×1
- 3 20点×1
- 4 10点×1

得	点
/	
100	

# 確認テスト 5

氏名

氏名
----

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるる懸樋のしづくならでは、つゆおとなふものなし。闕伽棚に菊、紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

〔徒然草〕第十一段より

1 この文章を二つの段落に分ける場合、どこで分かれるか。後半の初めの五字を抜き出して書け。

--

2 線①「かくてもあられるよ」を、「かくても」の内容を具体的に明らかにして、現代語に訳せ。

--

3 線②「少しことさめて」とあるが、それはなぜか。次から選び、記号で答えよ。

- ア 周りが囲まれているので、柑子の木の見事さが失われてしまっていると感じたから。
- イ 大きな柑子の木が、菊や紅葉の美しい庭を觀賞するのを妨げていると感じたから。
- ウ 柑子の木が囲われていることに、庵の主がまだ物欲を捨てることができないうことを感じたから。
- エ 大きな柑子の木の実を見るにつけて、食欲にひかれる自分自身を思い知らされるように感じたから。

( ) ( )

- 1 25点×1
- 2 50点×1
- 3 25点×1

得点
100



# 確認テスト 7

氏名

--

**演習**

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

それ、人の友とあるものは、富めるを尊み、<sup>①</sup>ねんごろなるを先とす。必ずしも情けあると、すなほなるとをば愛せず。ただ、<sup>②</sup>糸竹・花月を友とせんにはしかじ。人の奴<sup>やうこ</sup>たるものは、賞罰はなはだしく、恩顧厚きを先とす。さらに、はぐくみあはれむと、安く静かなるとをば願はず。ただ、わが身を奴婢<sup>ぬひ</sup>とするにはしかず。いかが奴婢<sup>ぬひ</sup>とするとならば、もしなすべきことあれば、すなはちおのが身を使ふ。たゆからずしもあらねど、<sup>③</sup>人を従へ、人を顧<sup>かへり</sup>みるよりやすし。もし歩<sup>あゆ</sup>くべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども、馬・鞍<sup>くら</sup>・牛・車と、心を悩ますにはしかず。今、一身をわかちて、二つの用をなす。手の奴、足の乗り物、よくわが心にかなへり。心、身の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなれば使ふ。使ふとても、たびたび過ぎず。もの憂しとても、心を動かすことなし。いかにいはんや、つねに歩き、つねに働くは養性なるべし。なんぞいたづらに休みをらん。人を悩ます、罪業なり。<sup>④</sup>いかが他の力を借るべき。——中略——すべて、かやうの楽しみ、富める人に対していふにはあらず。ただ、わが身ひとつにとりて、昔今とをなぞらふるばかりなり。

〔方丈記〕より

1 ——— 線①・②の意味として適切なものを、次から選び、記号で答えよ。

① ア 心から仲のよい人      イ 長年自分を引きたててくれた人

ウ 物質的に親切な人      エ いたわりや同情心の厚い人

② ア 音楽      イ 絵画

ウ 詩歌      エ 庭先の草花

② ( ) ( ) ( )

2 ——— 線③「人を従へ、人を顧みるよりやすし」とあるが、それはどうすることか。現代語で簡単に書け。

[ ]

3 ——— 線④「いかが他の力を借るべき」を、現代語に訳せ。

[ ]

- 1 20点×2
- 2 30点×1
- 3 30点×1

得点
100

# 確認テスト 8

氏名

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

富士河といふは、富士の山より落ちたる水なり。その国の人の出でて語るやう、「一年ごろ、物にまかりたりしに、いと暑かりしかば、この水の面に休みつ見れば、河上の方より黄なる物流れ来て、物につきて止まりたるを見れば、反敵なり。とりあげて見れば、黄なる紙に、丹して、濃くうるはしく書かれたり。あやしくて見れば、来年なるべき国どもを、除目のごとみな書きて、この国来年あくべきにも、守なして、又添へて二人をなしたり。あやし、あさましと思ひて、とりあげて、乾して、をさめたりしを、かへる年の司召に、この文に書かれたりし、一つたがはず、この国の守とありしままなるを、三月のうちになくなりて、又なり代りたるも、このかたはらに書きつけられたりし人なり。かかる事なむありし。来年の司召などは、今年この山に、そこばくの神々集まりて、ない給ふなりけりと見給へし。めづらかなる事にさぶらふ」と語る。

〔更級日記〕より

1 〓線1「かかる事」とは、どのようなことか。それが説明されている箇所を文章中から探し、初めと終わりの五字を書き抜け。

初め……

終わり……

2 〓線2「この山」とは、どのようなことか。文章中から抜き出して書け。

3 〓線①「あやし、あさましと思ひて」とあるが、なぜそう思ったのか。次から選び記号で答えよ。

- ア 国司として二人の名前が書かれていたから。
- イ 朝廷が発する官吏任免状である除目の紙が流れてきたから。
- ウ 黄色と赤の見たこともないような紙が流れてきたから。
- エ 紙に書かれていたとおりの人が国司になったから。

4 〓線②「なくなりて」の主語（動作主）を、文章中から抜き出して書け。

- 1 25点×1
- 2 25点×1
- 3 25点×1
- 4 25点×1

得	点
100	



# 確認テスト 9

氏名

**演習**

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

いづれの書かみを読むとても、初心のほどは、片端より文義を解せむとはすべからず。まづたいていにさらさらと見て、他の書に移り、これやかれやと読みては、またさきに読みたる書へ立ち返りつつ、幾遍も読むうちには、初めに聞きこえざりしことも、そろそろと聞こゆるやうになりゆくものなり。文義の心得がたきところを、初めより、一々に解せむとしては、滞りて、進まぬことあれば、聞こえぬところは、まづそのままにて過ぐすぞよき。殊に世に難きことにしたるふしぶしを、まづ知らむとするは、いといとわろし。ただよく聞こえたるところに心をつけて、深く味はふべきなり。こはよく聞こえたることなりと思ひて、なほざりに見過ぐせば、すべて細かなる意味も知られず、また多く心得たがひのありて、いつまでも、その誤りをえ悟ららことあるなり。

(「うひ山ぶみ」より)

1  に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア ざれ      イ るる      ウ れし      エ ざる

(      )

2 この文章を二つに分ける場合、どこで分かれるか。後半の初めの五字を抜き出して書け。

3 — 線部「聞こえ」とあるが、この文章では、「聞こゆ」という言葉はどのような意味で用いられているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 耳に入る      イ 世間に知られる      ウ 理解される      エ 申し上げる

(      )

4 この文章で、筆者は、どのような読書の方法を勧めているか。現代語を用いて、簡単に説明せよ。

- 1 20点×1  
2 20点×1  
3 20点×1  
4 40点×1

得	点
/	
100	

# 確認テスト 10

氏名

氏名
----

**演習** 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

藤原利基朝臣の右近中将にて住み侍りける曹司の、<sup>①</sup>身まかりてのち、人も住まずなりにけるに、<sup>②</sup>秋の夜ふけて、ものよりまうで来けるついでに見入れければ、もとありし前裁もいとしげく荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみける

みほるのありきけ  
御春有助

君が植ゑしひとむら薄虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな

〔古今和歌集〕より

1 ——— 線①「身まかりて」の意味を、次から選び記号で答えよ。

- ア 転居して    イ 死んで    ウ 流刑になって    エ 退去して

( )

2 ——— 線②「秋の夜」の情景を詠んだ俳句には○、他の情景を詠んだ俳句には×の記号で答えよ。

- |   |              |    |     |
|---|--------------|----|-----|
| ア | 下京や雪つむ上のよるの雨 | 凡兆 | ( ) |
| イ | 荒海や佐渡に横たふ天の川 | 芭蕉 | ( ) |
| ウ | 月天心貧しき町を通りけり | 蕪村 | ( ) |
| エ | 終夜秋風聞くや裏の山   | 曾良 | ( ) |

3 文章中の和歌には、掛詞が用いられている。①その言葉を抜き出して、②どのような意味とどのような意味が掛けられているのかを説明せよ。

① 掛詞……

[ ]

② 意味……

[ ]

- 1 15点×1  
 2 10点×4  
 3 ①15点×1  
     ②30点×1

得点
100

# 確認テスト 1

氏名

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

大蔵卿ばかり耳とき人はなし。まことに蚊のまつげの落つるをも聞きつけ給ひつべうこそありしか。職の御曹司おんざうしの西面にしおもてに住みしころ、大殿の新中将、宿直とのみにてものなどいひしに、そばにある人の、「この中将に扇の絵のこと言へ。」とささめけば、「いま、かの君の立ち給ひなんにを。」と、いとみそかにいひ入るるを、その人だにえ聞きついで、「なにとか、なにとか。」と耳をかたぶけ来るに、遠くゐて、「にくし。さのたまはば、今日は立たじ。」と④のたまひしこそ、いかで聞きつけ給ふらんと、あさましかりしか。

〔枕草子〕第二五六段より

1 線①～④の主語（動作主）はだれか。次から選び、記号で答えよ。

- ア 作者（清少納言）    イ 大蔵卿    ウ 職の御曹司    エ そばにある人  
 ① (    ア    )    ② (    エ    )    ③ (    ア    )    ④ (    イ    )

2 推量の助動詞「べし」のウ音便を、文章中から抜き出して書け。

べう

3 作者は、大蔵卿という人物をどのように評しているか。現代語で簡単に書け。

どんな小さな出来事でも、すぐに聞きつけて来る人。

- 1 15点×4  
 2 20点×1  
 3 20点×1

得点
100

# 確認テスト 2

氏名

氏名
----

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

四条大納言の、かく何事もすぐれ、めでたくおはしますを、大入道殿、「いかでか、かからむ。うらやましくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ、口惜しけれ」と申させ給ひければ、中の関白殿・粟田殿などは、「げに、<sup>①</sup>さもどや思すらむ」と、恥づかしげなる御けしきにて、ものも宣はぬに、この入道殿は、いと若くおはします御身にて、「<sup>②</sup>影をば踏まで、つらをやは踏まぬ」とこそ仰せられけり。まことにこそ<sup>③</sup>さはおはしますめれ。内大臣殿をだに近くて見奉り給はぬよ。

〔大鏡〕道長伝より

1 線①・②の指示語は、何を指しているか。文章中から抜き出して書け。

① いかでか、かからむ。うらやましくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ、口惜しけれ

② 影をば踏まで、つらをやは踏まぬ

2 線1「影だに踏むべくもあらぬ」を現代語に訳せ。

〔影（影法師）さえ踏めそうにない（影すら踏むことができない）〕

3 線2「影をば踏まで、つらをやは踏まぬ」の意味として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 影法師は踏まないが、上位に立って面目はつぶしてやる。
- イ 影法師は踏んでやるし、上位に立って面目もつぶしてやる。
- ウ 影法師は踏まないし、上位に立って面目をつぶすこともしない。
- エ 影法師は踏めないし、上位に立って面目をつぶすこともできないだろう。

(ア)

- 1 25点×2
- 2 30点×1
- 3 20点×1

得点
100

# 確認テスト 3

氏名

氏名
----

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

高名の木登りといひし男、人を掬おさめて、高き木に登せて、梢こずえを切らせしに、いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、降るときに、軒長のきたけばかりになりて、過ちすな。心して降りよと言葉をかはべりしを、かばかりになりては、飛び降るとも降りなむ。いかにかくは言ふぞと申しはべりしかば、そのことに候ふ。目くるまき、枝危ふきほどは、己が恐れはべれば申さず。過ちは、安き所になりて、必ずつかまつることに候ふと言ふ。

〔徒然草〕第一〇九段より

1 線部「梢を切らせし」の主語（動作主）を、文章中から抜き出して書け。

高名の木登り（高名の木登りといひし男）

2 文章中から会話文になっている部分を三か所探し、その初めと終わりの五字を抜き出して書け。

初め……	初め……	初め……	終わり……	終わり……	終わり……
過ちすな。	かばかりに	そのことに	して降りよ	くは言ふぞ	とに候ふ。

3 この文章の趣旨として最も適当な四字熟語を次から選び、記号で答えよ。

- ア 四面楚歌
- イ 刻苦勉励
- ウ 油断大敵
- エ 愛別離苦

(ウ)

- 1 20点×1
- 2 20点×3
- 3 20点×1

得点
100

# 確認テスト 4

氏名

--

**演習**

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

年月に添へて、(帝は)御息所みよすんどころの御事を思し忘るる折なし。慰むやと、然るべき人々を参らせ給へど、なずらひに思さるるだにいと難き世かなと、うとましようのみよろづに思しなりぬるに、先帝せんだいの四の宮の、御かたちすぐれ給へる聞こえ高くおはします。母后世になくかしづき聞こえ給ふを、上に侍ふまはひ典侍ないのりすけは、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見奉り、今もほの見奉りて、「亡せ給ひにし御息所の御かたちに似給へる人を、三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見奉りつけぬを、后の宮の姫宮こそ、いとよう覚えて生ひ出でさせ給へりけれ。ありがたき御かたち人になむ。」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねんごろに聞こえさせ給ひけり。

(「源氏物語」桐壺より)

1 線1～5は、①だれの、②だれに対する敬語か。次から選び、記号で答えよ。(同じ記号を何回使ってもよい。)

- |   |   |   |     |     |     |   |        |   |    |   |       |
|---|---|---|-----|-----|-----|---|--------|---|----|---|-------|
| ア | 帝 | イ | 御息所 | ウ   | 四の宮 | エ | 典侍     | オ | 作者 | カ | 似給へる人 |
| 1 | ① | ( | オ   | から② | (   | ア | に対する敬語 |   |    |   |       |
| 2 | ① | ( | オ   | から② | (   | ウ | に対する敬語 |   |    |   |       |
| 3 | ① | ( | エ   | から② | (   | イ | に対する敬語 |   |    |   |       |
| 4 | ① | ( | エ   | から② | (   | カ | に対する敬語 |   |    |   |       |
| 5 | ① | ( | オ   | から② | (   | ア | に対する敬語 |   |    |   |       |

2 線①「典侍」は、「先帝の四の宮」を、いつから知っていたのか。現代語で簡潔に答えよ。

四の宮がまだ幼かったころから。

3 線②「させ給へ」は、「二方向への敬語」である。だれとだれに対する敬語か。文章中の言葉を書き抜いて答えよ。

四の宮

と

帝

4 線③「奏し」は、だれに対して用いられる敬語か。文章中の言葉を書き抜いて答えよ。

帝

- 1 10点×5
- 2 20点×1
- 3 20点×1
- 4 10点×1

得	点
/	
100	

# 確認テスト 5

氏名

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること侍りしに、遙かなる苔の道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるる懸樋のしづくならでは、つゆおとなふものなし。闕伽棚に菊、紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

〔徒然草〕第十一段より

1 この文章を二つの段落に分ける場合、どこで分かれるか。後半の初めの五字を抜き出して書け。

かくてもあ

2 線①「かくてもあられるよ」を、「かくても」の内容を具体的に明らかにして、現代語に訳せ。

世俗の世界を離れて、だれも訪れる人もない山里に、一人で庵を構え、仏に仕えながら生きる**ことができるもの**の**だ**なあ。

3 線②「少しことさめて」とあるが、それはなぜか。次から選び、記号で答えよ。

- ア 周りが囲まれているので、柑子の木の見事さが失われてしまっていると感じたから。
- イ 大きな柑子の木が、菊や紅葉の美しい庭を觀賞するのを妨げていると感じたから。
- ウ 柑子の木が囲われていることに、庵の主がまだ物欲を捨てる**ことができ**ないことを感じたから。
- エ 大きな柑子の木の実を見るにつけて、食欲にひかれる自分自身を思い知らされるように感じたから。

( ) ウ ( )

- 1 25点×1
- 2 50点×1
- 3 25点×1

得点
100

# 確認テスト 6

氏名

--

**演習**

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

むかし、をとこ、片田舎にすみけり。をとこ、宮つかへしにとて、別れ惜しみて行きけるままに、三年ござりければ、<sup>①</sup>待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、<sup>こよひ</sup>今宵あはむとちぎりたりけるに、このをとこきたりけり。「この戸あけたまへ」と<sup>②</sup>たたきけれど、あけで、歌をなむよみて出したりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそにひまくらすれ  
といひだしたりければ、

<sup>あづさゆみ まゆみつきゆみ</sup>梓弓真弓槻弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよ

といひて、去なむとしければ、女、

梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにしものを

といひけれど、をとこかへりにけり。女、いとかなしくて、しりにたちて追ひゆけど、え追ひつかで、清水のある所に伏しにけり。そこなりける岩に、およびの血して書きつけける。

あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる  
と書きて、そこに<sup>③</sup>いたづらになりけり。

〔伊勢物語〕第二四段より

1 線①・②の主語（動作主）を、文章中から抜き出して書け。

①	女	②	をとこ
---	---	---	-----

2 線③「いたづらになりけり」の意味を次から選び、記号で答えよ。

ア	することもなく過ごしていた	イ	死んでしまった
ウ	罪を犯してしまった	エ	男性と別れてしまった

3 文章中の和歌から、枕詞とそれがかかる言葉の組み合わせを、二つ抜き出して書け。

枕詞	あらたまの	かかる言葉	年
枕詞	梓弓	かかる言葉	引く(引け)

4 三首目の和歌から、女の気持ちを考えて、現代語で簡単に書け。

男が宮仕えして出世することよりも、ずっと自分のそばにいてほしかった。

- 1 20点×2
- 2 10点×1
- 3 10点×2
- 4 30点×1

得点
100



# 確認テスト 7

氏名

--

**演習**

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

それ、人の友とあるものは、富めるを尊み、<sup>①</sup>ねんごろなるを先とす。必ずしも情けあると、すなほなるとをば愛せず。ただ、<sup>②</sup>糸竹・花月を友とせんにはしからじ。人の奴<sup>やうこ</sup>たるものは、賞罰はなはだしく、恩顧厚きを先とす。さらに、はぐくみあはれむと、安く静かなるとをば願はず。ただ、わが身を奴婢<sup>ぬひ</sup>とするにはしからず。いかが奴婢<sup>ぬひ</sup>とするとならば、もしなすべきことあれば、すなはちおのが身を使ふ。たゆからずしもあらねど、<sup>③</sup>人を従へ、人を顧<sup>かへり</sup>みるよりやすし。もし歩<sup>あゆ</sup>くべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども、馬・鞍<sup>くら</sup>・牛・車と、心を悩ますにはしからず。今、一身をわかちて、二つの用をなす。手の奴、足の乗り物、よくわが心にかなへり。心、身の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなれば使ふ。使ふとても、たびたび過ぎさず。もの憂しとても、心を動かすことなし。いかにいはんや、つねに歩き、つねに働くは養性なるべし。なんぞいたづらに休みをらん。人を悩ます、罪業なり。<sup>④</sup>いかが他の力を借るべき。——中略——すべて、かやうの楽しみ、富める人に対していふにはあらず。ただ、わが身ひとつにとりて、昔今とをなぞらふるばかりなり。

〔方丈記〕より

1 ——— 線①・②の意味として適切なものを、次から選び、記号で答えよ。

① ア 心から仲のよい人      イ 長年自分を引きたててくれた人

ウ 物質的に親切な人      エ いたわりや同情心の厚い人

② ア 音楽      イ 絵画

ウ 詩歌      エ 庭先の草花

② ( )      ア ( )

① ( )      ウ ( )

2 ——— 線③「人を従へ、人を顧みるよりやすし」とあるが、それはどうすることか。現代語で簡単に書け。

自分の体を使って何かをすること。

3 ——— 線④「いかが他の力を借るべき」を、現代語に訳せ。

なぜ他の人の力を借りることがあろうか、(いや、ありはしない。)

- 1 20点×2
- 2 30点×1
- 3 30点×1

得点
100

# 確認テスト 8

氏名

## 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

富士河といふは、富士の山より落ちたる水なり。その国の人の出でて語るやう、「一年ごろ、物にまかりたりしに、いと暑かりしかば、この水の面に休みつ見れば、河上の方より黄なる物流れ来て、物につきて止まりたるを見れば、反敵なり。とりあげて見れば、黄なる紙に、丹して、濃くうるはしく書かれたり。あやしくて見れば、来年なるべき国どもを、除目のごとみな書きて、この国来年あくべきにも、守なして、又添へて二人をなしたり。あやし、あさましと思ひて、とりあげて、乾して、をさめたりしを、かへる年の司召に、この文に書かれたりし、一つたがはず、この国の守とありしままなるを、三月のうちになくなりて、又なり代りたるも、このかたはらに書きつけられたりし人なり。かかる事なむありし。来年の司召などは、今年この山に、そこばくの神々集まりて、ない給ふなりけりと見給へし。めづらかなる事にさぶらふ」と語る。

〔「更級日記」より〕

1 線1「かかる事」とは、どのようなことか。それが説明されている箇所を文章中から探し、初めと終わりの五字を書き抜け。

初め……

一年ごろ、

終わり……

し人なり。

2 線2「この山」とは、どこのことか。文章中から抜き出して書け。

富士の山

3 線①「あやし、あさましと思ひて」とあるが、なぜそう思ったのか。次から選び記号で答えよ。

- ア 国司として二人の名前が書かれていたから。
- イ 朝廷が発する官吏任免状である除目の紙が流れてきたから。
- ウ 黄色と赤の見たこともないような紙が流れてきたから。
- エ 紙に書かれていたとおりの人が国司になったから。

4 線②「なくなりて」の主語（動作主）を、文章中から抜き出して書け。

国の守

- 1 25点×1
- 2 25点×1
- 3 25点×1
- 4 25点×1

得点
100

# 確認テスト 9

氏 名

--

**演習**

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

いづれの書かみを読むとても、初心のほどは、片端より文義を解せむとはすべからず。まづたいていにさらさらと見て、他の書に移り、これやかれやと読みては、またさきに読みたる書へ立ち返りつつ、幾遍も読むうちには、初めに聞きこえざりしことも、そろそろと聞こゆるやうになりゆくものなり。文義の心得がたきところを、初めより、一々に解せむとしては、滞りて、進まぬことあれば、聞こえぬところは、まづそのままにて過ぐすぞよき。殊に世に難きことにしたるふしぶしを、まづ知らむとするは、いといとわろし。ただよく聞こえたるところに心をつけて、深く味はふべきなり。こはよく聞こえたることなりと思ひて、なほざりに見過ぐせば、すべて細かなる意味も知られず、また多く心得たがひのありて、いつまでも、その誤りをえ悟ららことあるなり。

(「うひ山ぶみ」より)

1  に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア ざれ      イ るる      ウ れし      エ ざる

(      )      **エ**      (      )

2 この文章を二つに分ける場合、どこで分かれるか。後半の初めの五字を抜き出して書け。

文義の心得

3 ———線部「聞こえ」とあるが、この文章では、「聞こゆ」という言葉はどのような意味で用いられているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 耳に入る      イ 世間に知られる      ウ 理解される      エ 申し上げる

(      )      **ウ**      (      )

4 この文章で、筆者は、どのような読書の方法を勧めているか。現代語を用いて、簡単に説明せよ。

文章の細かな言葉にこだわらず、多くの本を読み、すでに知っていると思つていることに気をつけて読むべきである。

- 1 20点×1  
2 20点×1  
3 20点×1  
4 40点×1

得 点
100

# 確認テスト 10

氏名

氏名
----

### 演習

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

藤原利基朝臣の右近中将にて住み侍りける曹司の、<sup>①</sup>身まかりてのち、人も住まずなりにけるに、<sup>②</sup>秋の夜ふけて、ものよりまうで来けるついでに見入れければ、もとありし前裁もいとしげく荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみける

みほるのありきけ  
御春有助

君が植ゑしひとむら薄虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな

〔古今和歌集〕より

1 線①「身まかりて」の意味を、次から選び記号で答えよ。

- ア 転居して    イ 死んで    ウ 流刑になって    エ 退去して

(    **イ**    )

2 線②「秋の夜」の情景を詠んだ俳句には○、他の情景を詠んだ俳句には×の記号で答えよ。

- |   |              |    |             |
|---|--------------|----|-------------|
| ア | 下京や雪つむ上のよるの雨 | 凡兆 | (    ×    ) |
| イ | 荒海や佐渡に横たふ天の川 | 芭蕉 | (    ○    ) |
| ウ | 月天心貧しき町を通りけり | 蕪村 | (    ○    ) |
| エ | 終夜秋風聞くや裏の山   | 曾良 | (    ○    ) |

3 文章中の和歌には、掛詞が用いられている。①その言葉を抜き出して、②どのような意味とどのような意味が掛けられているのかを説明せよ。

① 掛詞……

しげき

② 意味……

薄が茂っているという意味の「しげし」と、虫がしきりに鳴いているという意味の「しげし」が掛けられている。

- 1 15点×1  
 2 10点×4  
 3 ①15点×1  
 ②30点×1

得点
100